



「金融の原点回帰-欧州における non-greedy な環境銀行モデルからのヒント-」

開発経済調査部 主任研究員 古屋 力

ある詩人のモノローグの含意

先日、英国を訪問した際、片田舎に住む詩人の自宅に招待され、彼の家族とともに美味しい夕食を頂きながら愉快的時間を過ごした。その席上で詩人は問わず語りでこう言った。「欧州の古い諺に、ゆっくりと歩む旅人は一番遠くまで辿りつける、という示唆に富んだ箴言がある。いまこそ、その意味を考える時期である。いま世界の経済の仕組みそのものが壊れつつある。急進的で greedy (貪欲) な仕組みにはもはや限界が来ている。いまこそ、新たに地球環境と人間に優しい non-greedy な仕組みを構築すべき時代にあると思う。」と。そこに深い洞察と未来志向の含意を感じた。

greedy な経済モデルの限界と蹉跌

かつてドイツのシュミット元首相も、既に8年前のことではあるが、greedy で行き過ぎた市場原理主義と株主価値極大化至上主義の弊害を喝破した。そして「エゴイズムが最高の掟であってはならない」と警告している。しかし、残念ながら彼らの懸念通りの悲劇がいまや世界を覆いつくしている。いままさに、世界中の人々は、自分たちが被った甚大な金融危機の深刻さと自らが犯してきた行過ぎた greedy な行為を自省し、そのモデルの限界と危険を知り、短期的な目先の利益追求よりも長期的な安定性を優先することの重要性を認識し、量的拡大よりも人間の尊厳と健康を担保できる質の充実を重視する時代への移行期にあることを深く感じ始めている。その文脈の中で、持続可能な経済システムを担保する重要不可欠な要件として、新しい金融モデルが模索されている。

いまや時代は、ボラタイルで greedy な金融モデルではなく、穏やかでかつ長期的な持続性を可能とする「non-greedy な金融モデル」を求めているのである。数か月前、ポール・ボルカー元 FRB 議長は、金融工学は市場テストに耐えられなかったと総括し、金融工学のイノベーションを駆使した金融派生商品は最終的に利益よりもコストとリスクの方が大きかったと語っている。確かにこの一連の議論は、従来型の投資銀行機能や派生商品を全否定するものではないし、改善を加えながら本来の投資銀行機能は商業銀行の傘下で存続進化してゆくであろう。しかし、一方で、本来の金融の在り方の原点回帰を促し、根本まで掘り下げて再考する契機ともなっている点が重要なのである。いまや我々が直面している問題は歴史的規模の問題であり小手先の処方箋で快方に向かう性質のものではないのである。

欧州における non-greedy な環境銀行モデル

greedy な金融モデルの対極に位置する金融サービスを提供している金融機関が欧州に存在する。すでに世界中で、気候変動や環境汚染、資源の枯渇等の様々な環境問題への高い意識から「持続可能性」に頓着した形で、多くの金融機関が様々な工夫をこらし

ながら環境配慮行動を始めている。中でも環境先進地域の欧州では、小ぶりながらも従来型の商業銀行とは全く違う先駆的な「環境銀行のモデル」も幾つか誕生している

彼らは、利益の極大化を志向せず、non-greedy なモデルを構築している。高い透明性を維持しながら志ある預金者や投資家から低利で資金調達し、環境分野等の高い専門性に裏打ちされた卓越した審査能力で与信リスクの最小化に努め、その結果、着実に持続的に業績を伸ばしてきている。環境ファイナンスに留まらず、零細個人向マイクロ・ファイナンスやフェアトレード・ファイナンスへの事業拡大もしており、それなりの成果を上げている。これらを支えているのは、政府や預金者や事業者等、それぞれの関係当事者の環境配慮行動である。彼らは、経済性より環境や公共性への配慮を優先している。政府は預金金利を非課税とし、銀行は他の事業融資より低い低利融資を行い、事業者は別の儲かる事業に比べ低い収益性を我慢し投資をする。そのいずれもが「私的な経済性」を少しずつ我慢しながら「環境という公益」のために行動している。そうした環境配慮行動により、各当事者がそれぞれ我慢した分の合計を上回る公益が全体として得られる仕組みとなっている。こうした環境配慮行動を志向する事業者と預金者との仲介を行う高い志を持つ金融機関の存在が、世界中の多くの投資家や事業家から高い評価を受け、いまや急成長の途上にある。

人間に優しい金融

こうした銀行は、一般にはソーシャル・バンク (Social Bank) とかコミュニティ・バンク (Community Bank) とか呼ばれることが多い。必ずしも環境ファイナンスだけに特化しているわけではないが、地域経済に貢献しつつ、環境保全を始め、マイクロ・ファイナンス、育児サービス、教育等、公共性の高い社会的公正に資する事業に傾注している。共通してみられる特徴は、「利潤極大化を目標としていないこと」に加え、「志のあるお金」「意義のあるお金」へのこだわりと「預けた資金、出資した資金がその銀行によってどこにどの程度、いかなる資金使途で使われているかを、正確に知ることができる透明性」、そして「高い審査能力」にある。その分、融資先に制限もあり、一般の大手商業銀行に比べて預金金利が低い傾向もあるが、出資者や預金者などは一般金融機関に劣後する経済的対価やサービスを理解し、不利益ともいえる事実も受け入れている。彼らが基本とする「顔の見えるリレーションシップ・バンキング」や、「社会性を重視する金融」「顧客から逃げない金融」は、昨今の投資銀行モデルの特徴である「顔が見えない匿名性」や「組成・転売 (originate and distribution) 型ビジネスモデル」、「利潤極大化至上主義」とは対極にあるものと言えよう。この両者の対比を「温かいお金」と「冷たいお金」と揶揄して形容する者もいる。

ソーシャルバンクから学ぶもの

こうしたソーシャルバンクのモデルだけでは、現在のグローバル化し自由な資本移動を前提とした世界経済に必要な資金を提供することは不可能であるが、このモデルから学ぶべき点がいくつかある。まず、ソーシャルバンクは、経営者のみならず、預金者や借入人、株主などすべてのステークホルダーが経済的価値以外の他の項目も評価し、それぞれが負うべきコストやリスクそして受け取る便益を相互に認識しているという点である。そこには当事者が **Prudence** をもって取引にかかわっており、本来の意味での「自己責任」といえる姿勢がある。もう一つは、金融機関が提供する大切な資金が、実態のあるかつ適切な経済活動に使われるとともに、それが社会厚生 (特に環境) の向上に資するという観点を配慮するなどまさに「金融の原点」というべき姿である。

今回の金融危機は、さまざまな要因が複合的に絡み合っており、まだその原因究明の途上にあるので拙速な判断はするべきではないが、少なくとも言えることは、ソーシャルバンクがもっている視点から投資銀行のビジネスモデルをチェックしていれば、もっ

と早い段階で多くの人が経済的な繁栄の持続不可能性を認識することができたのではないかということである。すでに米国の大手投資銀行が市場から消え去ったことは、もはや、刹那的で過度に **greedy** な拝金至上主義の金融モデルが終焉を迎えたのは間違いない。現段階は、まだ新しい金融モデルの模索が始まったばかりであり、最終的にどのような規制や監督基準が導入されることになるのかはまだ見えてこない。そうした中でも、ソーシャルバンクのモデルは、将来にわたってもニッチな存在にとどまる可能性が高く、これが全世界の金融モデルに代替するとは思えない。おそらくしばらくは従来型の金融モデルとは併存してゆくのであろう。しかし、いまや時代は志のあるお金を受け入れる機関を求めているし、そういったお金を出してもいいと考えている人は多い。世界の多くの金融機関関係者がそのモデルの含意を十分丁寧に考え、そのエッセンスを何らかの形で金融活動に取り入れ、新しいモデルを構築する時期に来ていることは確かである。

以上

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべてお客様御自身でご判断下さいますよう、宜しくお願い申し上げます。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、その正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されております。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。

Copyright 2008 Institute for International Monetary Affairs (財団法人 国際通貨研究所)

All rights reserved. Except for brief quotations embodied in articles and reviews, no part of this publication may be reproduced in any form or by any means, including photocopy, without permission from the Institute for International Monetary Affairs.

Address: 3-2, Nihombashi Hongokucho 1-chome, Chuo-ku, Tokyo 103-0021, Japan

Telephone: 81-3-3245-6934, Facsimile: 81-3-3231-5422

〒103-0021 東京都中央区日本橋本石町 1-3-2

電話：03-3245-6934 (代) ファックス：03-3231-5422

e-mail: admin@iima.or.jp

URL: <http://www.iima.or.jp>